

【幼児教育支援センターによるプロジェクト報告3. 園・施設との連携プロジェクト】

R5年度「常葉大学と園・施設との協議会」実践報告 —養成校と園・施設が協働して作り上げる実習指導を目指して—

A Report of Conference Between Tokoha University and ECEC Institutions in 2023
— In Order to Achieve Collaborative ECEC Practicum Coaching System —

森 広樹¹⁾ 赤塚 めぐみ²⁾ 徳永 聖子²⁾ 伊藤 理絵²⁾ 馬飼野 陽美¹⁾ 木下 藍¹⁾
鈴木 幸子¹⁾ 森岡 真樹¹⁾ 杉浦 誠²⁾ 遠藤 知里¹⁾

MORI Hiroki, AKATSUKA Megumi, TOKUNAGA Seiko, ITO Rie, MAKAINO Harumi, KINOSHITA Ai,
SUZUKI Sachiko, MORIOKA Masaki, SUGIURA Makoto, ENDO Chisato

¹⁾ 常葉大学短期大学部保育科 ²⁾ 常葉大学保育学部

1 はじめに

2018年度草薙キャンパス移転後、本学における「実習連絡協議会」は、保育学部保育学科及び短期大学部保育科が協働して実施、毎年様々に検討を重ね現在も進化し続けている。2020年度、新型コロナウイルス感染拡大の影響により、本学では例年通りの協議会開催を断念した。このことは、現場との連携を深め、協働して保育者を育成することの意義を改めて我々養成校教員に問う機会であったと同時に、協議会のあり方や開催方法、しいては現場と養成校が豊かに対話していくための環境作りを再検討するきっかけとなった。本実践報告では、R5年度「常葉大学と園・施設との協議会」における実施方法や各分科会の記録を提示し、よりよい保育者養成を築くための協議会のあり方について考察する。

2023年度より幼児教育支援センターを主体とした4つのプロジェクトチームが設立され、協議会においては、その中の一つ「常葉大学と園・施設との連携プロジェクト」のメンバーを中心に、保育学部保育学科、短期大学部保育科の教員の全面的な協力のもと進められている。本学では過去3年間協議会の副タイトルとして「よりよい保育者養成を目指して」を掲げており、養成校と園・施設の諸機関が豊かに対話できるための環境作りに励んでいる。更には、共に育成する精神を築くべく、実習計画や養成カリキュラムの提示、実習に関する事務的事項の共有に偏らず、実習生の率直な意見や、現場の実習に対する思い、そしてそれぞれの実習指導における取り組みを参加者間でしっかりと共有できるための協議会であることを目標としている。

2 今年度の協議会の構成と試みについて

今年度の協議会は以下の内容と実施方法により構成された。

1. 「常葉大学・短期大学部の保育者養成カリキュラムと実習計画について」動画オンデマンド配信型
2. 分科会1「どうしてですか？ 実習中の振り返り」対面型
3. 分科会2「福祉施設で働くというライフデザイン」オンライン ライブストーリーミング型

4. シンポジウム「協働する実習指導 一質の高い保育者養成を実現するために」対面・オンラインハイブリッド型

・オンデマンド配信の活用

1. のオンデマンド配信は、2021年新型コロナウイルス感染拡大の影響により、対面での実施が困難であったことをきっかけに始動した。協議会開催の約2週間前からウェブ上に掲載され、年間を通して本学のカリキュラムや実習計画について観覧できるシステムを導入している。すなわち、実習先にとっては必要な事項をオンライン上でいつでも確認いただけるようになっている。

・分科会1 学生の「声」から考える実習指導

2021年度より、本学の協議会では一部分科会で実習生の声を軸に実習指導の展開を考察する試みを実施している。実習終了後の学生に行った実習における充実度や指導内容のアンケート調査をもとに、実習を通して得る多様な経験と、個別的、場面的指導との結びつきから学びが深まっている実習生の実態を提示。その上で養成校と園・施設がよりよい実習指導について議論している。今年度は分科会1にて、実習中の振り返りに焦点を当て、学生にも参加してもらい、実習生の実体験から振り返り時の学びについて語ってもらった。また、現場の方々から学生に直接質問していただくことを通して、実習指導における指導内容に関する新たな気づきをもたらし対話となった。3年振りに対面スタイルで実施した分科会1では、園、施設の教職員、及び養成校教員が直接関わりながら議論を深めたことも大きな成果であった。

・分科会2 習、就職に渡る連続性と養成校と施設の協働

分科会2では「福祉施設で働くというライフデザイン」と題し、興味のある学生も積極的に参加できる仕組みになっている。2022年度は就職後の新任育成・研修の実態を現場から共有いただき、学生自身が就職後のワークバランスやキャリアアップについて具体的にイメージできるような話題提供が成されていた。今年度もオンラインで実施した本分科会では、養成校教員、幼児教育支援センター就職担当職員、学生、そして施設の教職員の方々と、様々な立場から話題提供が成された。今回は「養成校から施設へ」の連続性に重きを置き、大学側からは施設への就職実績や短期大学部における施設実習の課題、保育学部が目指す人材やゼミ、地域貢献活動などの実績などが共有された。施設からは保育専門職に求められるスキル、また実習指導の実際について話題提供が成された。施設実習に対する学生の率直な意見、質問も取り上げられ、そこから様々な指導への気づきが生まれている。また実習担当教員として出席した卒業生の声から、学びの連続性についても示されていた。それぞれライフステージが異なる立場のものたちが、一つのネットワークを築きながら、福祉施設で働くライフデザインについて理解を深めた分科会であった。

・シンポジウム 協働していくための新たな第一歩

これまで様々に検討を重ねてきた協議会のあり方だが、今年度は初の試みとしてオンライン、対面両方を用いたハイブリッド型のシンポジウムを開催した。質の高い保育者養成を実現するために、幼稚園、保育所、こども園、児童福祉施設の諸機関から、実習指導において大切にしていること、しいては協働して保育者養成するための今後の課題について話題を提供いただいた。現場のリーダー、管理職らが大学の場合から各々の試みやそれに対する率直な意見を惜しみなく発信いただく、このことは真に協働していくための大きな第一歩であった。様々な立場のものたちがフラットな関係性を築き、議論できる場はまだまだ少ないであろう。しかし、今回のシンポジウムでは、各機関の連携なくして、質の高い保育者養成の実現はないことが明確化されていたと考える。（*シンポジウムの内容、詳細については、本学報において別途投稿している論文をご覧ください。）

3 終わりに ～成果と今後の課題～

上記4つの柱から成った今年度の協議会は、それぞれ過去の内容の検討から発展しており、それらの繋がりを明確化しておくためにも、実践報告や成果を取りまとめ論文として残していくことが今後様々に再検討していく上で重要であろう。オンデマンド配信した実習計画や養成校カリキュラムは、これまで大学と短大の一部プログラムの違いから生じる混乱の防止に役立ってはいるものの、今後現場からの意見や質問を柔軟にヒヤリングできるようなシステムの設置も検討すべきである。分科会ではこれまでの積み重ねもあり、養成校と園・施設間、および園・施設同士で豊かに共有できる場になりつつあるが、各々多忙な環境下での集いであり、参加者数を伸ばすことは困難である。それらを考慮すると、やはり実践報告を現場に円滑に届けること、更にはICTを活用した協議会の配信方法については、まだ検討の余地があると考えられる。

本学の魅力の一つは、保育者養成校としての長い歴史にあり、県内の地域と深い結びつきを築き上げてきている。本学の卒業生が各々様々なライフコースをたどり、県内の保育に貢献し続けていることは本学の財産である。そういったこれまでの歩みを大切に、よりよい保育者養成を目指す上でも、現場の先生方としっかりタッグを組み、語り合い、見出していくための場として、協議会の更なる発展を目指していきたい。

謝辞

2023年6月28日に実施したR5年度「常葉大学と園・施設との協議会」にご協力いただいた教職員の皆様、及びご参加いただいた皆様に感謝申し上げます。

分科会1報告書

「どうしてですか？実習中の振り返り」

【担当者】

- ・徳永 聖子（保育学部）
- ・鈴木 幸子（保育科）

・木下 藍（保育科）

【出席状況】

申込み：53人、出席：49人、欠席：4人

*事前にグループ分けをして、受付で番号を伝え、グループ別に座っていただいた。

教員も1～2名各グループに座ってもらい、ファシリテーターをしてもらった。

【開催方法】

対面

1. 15:00～15:05 開会のあいさつ（保育科長：遠藤先生）

2. 15:05～15:15 趣旨説明（短大 徳永）

はじめに、学生の実習後の感想では実習中の振り返りが学びに大きく影響していると感じていることや満足度につながっているという実態が見えてきたこと、また、昨年度の協議会（分科会2）において、現場の保育者の方が実習生に対話的に関わることを大切にしてくださっていることを共有させていただいたことを伝え、本年度の分科会1では、「学生の学びにつながる振り返りについて」現場の皆様と協働して考えたいことを説明した。

さらに、保育学部は保育実習Ⅱの事後、短期大学部は幼稚園実習事後にとったアンケート結果を提示し、実習中の振り返りの実態と学生の感想や満足度を伝え、学生の具体的な感想については、この後、保育学部2名及び短期大学部2名の学生から話をしてもらうことを伝えた。

3. 15:15～15:40 学生の声

・短期大学部2年生：濱崎美結さん、望月梓さん

・保育学部4年生 2名：小林怜さん、直本和加菜さん

の4名に、1. 実習での振り返りの状況、2. 振り返りで学んだことや良かったことを具体的な事例を交えて伝えてもらった。その後、会場からの質問を募ると「思っていたことと違ったという話があったが、実習の振り返りでとくに違ったと感じたことは」という質問があり、小林さんが回答後、望月さん、浜崎さんも回答した。最後に、司会者から、学生の立場から振り返りがしやすいと感じたことや嬉しかったことを直本さんから回答してもらった。

4. 15:40～16:10 参加者によるグループディスカッション

5. 16:10～16:30 全体での共有

次のような意見がファシリテーター教員より共有された。

グループ1：保育所（短期大学部：加藤明代先生）

・午睡の時も忙しい中で振り返りの時間を設けてくださっている。また、午睡のないクラスや保育者の

方の休憩時間で振り返りを行ってくださっている園もあった。

- ・振り返りの時間を設定するのは難しく、学生から質問を受けてアドバイスをするのが精一杯という意見もあった。
- ・中間やまとめとして、振り返りの時間を設定してくださっている。
- ・振り返り際には“やさしく”を心掛け、意欲をなくさないように褒めることを90%、課題を10%ほど伝えるようにして、課題に関しては成長のための助言をするようにしているという意見があった。
- ・責任実習については、園の方針と異なる内容を持ってきた時の指導が難しいと感じているという意見があった。

グループ2：保育所（短期大学部：加藤寿子先生 保育学部：馬見塚先生）

- ・担当保育者の休憩時間に雑談を交えながら振り返りをしている。また、担任だけでなく、なるべく他の保育者、特に若手が実習生に声を書けるようにしている。
- ・わからないことがあれば、その場で聞いていいことにしている。複数配置なので、そのような対応ができる。また、写真を撮って記録するようにさせている。後でそれを見て、思い出せるように。
- ・わからないことはその日のうちに解決するように指導している。責任実習の後にはじっくりと反省会をするが、それ以外は週に一回くらいだ。日誌の指導にも力を入れている。現場に出てから困らないように、毎日、必ずコメントを入れるようにしている。
- ・担任だと手が離せないので、私（主任）が見るようにして週末にまとめて振り返りをしている。疑問点は午睡の時間に聞くようにしている。すべて焼津市の「実習生受け入れ要項」「実習指導マニュアル」に基づいて行っている。
- ・学生から保育者から声をかけてほしいという声もあったけど、学生の方から主体的に聞いてほしい。実習生には、毎朝、今日の振り返りはどの時間にしてもらえるか、その日の担任に聞くように指導している。こちらから聞いても「大丈夫です」という答えが返ってくる人が多いので、こまめに聞き出すようにしている。

グループ3：保育所（保育学部：増田先生）

- ・熱心に振り返りをしてきている。実習終了時にや日誌を返却する時に振り返りをしている園もあり、翌日には返却するようにして下さっているとのことだった。
- ・全員が責任（部分）実習見て、付箋でコメントを伝えていたり、学生に対して気付いたこと等を付箋に書いて声をかけるようにしていたり、気軽に話せるようにしているなど、園では同僚性を大事にしており、実習生も含めて考えているという意見があった。
- ・質問思いつかない学生もいるので、質問カードを作成し、オリエンテーションの際に渡している園もあった。

グループ4：認定こども園（保育学部：石田先生）

- ・学生が求めていることと保育者が伝えたいこと、また、先程の学生が嬉しかったことについてもそういうことが嬉しいと思うのかなど、基準や価値観のズレがあり、合っているのか足りているのか考える。園と学生もそうだし、園と大学という視点でもズレがあるので、もう少し話し合っただけで基準等ができる

いいのではないかという意見があった。

・自己評価とのズレがある場合に、どのように伝えるか、どのくらい求めていいのか迷うことがあるという意見があった。

グループ5：認定こども園（短期大学部：小倉先生）

・色んな時間に実施してくださっている。・日誌は翌日に返却して、振り返りを行うようにしてくださっている園もあった。

・園としては、「保育楽しいよ」ということを感じてほしいし、「笑顔で楽しんで」ほしい。

・日誌等も大事だが、夜遅くまで書く日誌のあり方は変えた方がいいのではないかという意見が出た。

・人となりも大事なので、実習に送り出す時に、「遊ぶことから学んで」「失敗恐れずに」「子どもと笑い合うことを楽しんで」「先生になろうとしすぎない」ということを伝えてほしい。

・日誌は、実習生に園のカメラを渡してドキュメンテーションで書いてもらっているという園もあった。

現場も日誌の書き方変わり、実習日誌を実情が異なっていると感ずるので、色んなバージョンがあってもいいのではないかという意見があった。

グループ6：認定こども園（保育学部：甲賀先生）

・職員の振り返りに入ってもらって、保育者の考え等を聞いてもらいながら、実習生の振り返りも一緒に行っているという園もあった。

・日誌は直しすぎないようにしているやコメントは赤だときつい感じがするので、青とかピンクとかやさしい色を使うようにしている。また、ドキュメンテーションの日誌を検討しているという園もあった。

・週末に振り返り、後半どうしたいか確認したり、好きなことや得意なことを聞き、実習で活かせるようにしている園もあった。

グループ7：認定こども園・幼稚園（短期大学部：木下先生）

・子ども園だったので、保育実習の場合には午睡の時間に、教育実習の場合には1号認定の子どもが降園した後に振り返りをしている園が多かった。

・若い先生のクラスに配属したり、歳の近い職員と振り返りをするすることで、話しやすい環境を作ってくださっている園もあった。

・子どもの姿を語り合う、分かち合うことで、責任実習の指導案の内容にも反映できるようにしている園もあった。

・振り返りを行うことで、保育者も気付いていないことを知れるなど、保育者の振り返りにもなることがあるという意見もあった。

グループ8：認定こども園・幼稚園（保育学部：今村先生）

・これまでの実習生一度も質問が出なかった学生がいたので、それからは振り返りの時間を毎日取っているという園もあったが、毎日難しいという園や掃除や制作などの作業を一緒にしながら話をしているという園もあった。

・できたかできないか丸を付けてもらう簡単な振り返りシートを作成し、実習生と保育者がお互いに付けたものを照らし合わせて振り返りを行っているという園もあった。

- ・ 日誌は、複数の保育者が共有し学生には付箋を貼って伝えているという園もあった。
- ・ 学生によっては、字を解読するのに時間がかかる場合がある。
- ・ 子ども理解はできている学生が多いが、保育者の意図が見えていないのでその点を指導しているという意見があった。

グループ9：幼稚園（短期大学部 大村先生）

- ・ 振り返りを大事にしているという意見があり、クラス担任が日誌を返却する際に行ったり、同じ部屋にいて作業をしながら行っているという園もあった。
- ・ 教員の訪問指導も振り返りの機会になるので、訪問の時期を検討してほしいという意見があった。

グループ10（保育学部：柴田先生）施設のグループ

- ・ 職員の打合せの時に一緒に振り返りを行っている園、時間を設定している園、時間を見計らって実施している園と様々だった。
- ・ 学生から質問が出てこないケースもあるので、「今日どうだった？」と聞き学生が話しやすいようにしていたり、質問項目を準備したりしてくださっているとのことだった。
- ・ 子どもや利用児・者、人間理解を深めていけるといいと考えているとのことだった。

● 16：25～16：40 まとめ（短期大学部 鈴木幸子先生）

各グループの話から、共通していることをもとに4点にまとめて以下のことを伝えた。

- 1 点目に、各園の状況に併せて時間を設定してくださっていること。
 - 2 点目に、日誌を利用して振り返りを行っていること。日誌の書き方については今後検討していく必要があること。
 - 3 点目に学生に合うように、そして“やさしく”寄り添って振り返りを行ってくださっていること。
 - 4 点目に大学と対話して、基準や指導のあり方、訪問指導の時期等を検討していく必要があること。
- 最後に、養成校と園が連携して、保育者養成のために対話を続けていきたいことを伝えた。

最後に、アンケートのお願いとこの後のシンポジウムについて案内をして終了した。

(文責：徳永聖子)

分科会2 報告書

「福祉施設で働くというライフデザイン～スキルマネジメントの観点から『養成校から施設へ』の連続性を考える」

【担当者】

- ・ 赤塚 めぐみ（保育学部）
- ・ 馬飼野 陽美（保育科）
- ・ 山屋 春恵（保育学部、協力教員）
- ・ 種石 優子（幼児教育支援センター、協力教員）

【出席状況】

総計 57 名

(内訳) オンライン参加 ID 37 件 (施設: 24、教員: 11、保育学部3年生2名)

オンライン視聴室にて参加した学生7名 (保育学部4名、短期大学部3名)

オンデマンド配信にて参加した学生13名

【開催方法】

オンライン

本分科会は、福祉や教育(保育)現場における人材不足を解消するために施設職員の魅力を共有することと、保育の在り方問題等の報道を通して進路に悩む学生に向けて、生涯学習の観点から養成校と施設とのより良い連続性について協議することを目的に企画した。内容は、(1)常葉大学からの話題提供、(2)施設からの話題提供、(3)参加者によるディスカッションから構成された。

(1) 常葉大学からの話題提供: ここでは、幼児教育支援センターの種石氏より、過去2年間における短期大学部および保育学部の児童養護施設や障害児(者)施設への就職実績について報告された。短大から社会福祉施設(保育所を除く)の就職実績は学年の5~6%に対して、保育学部では13~22%の就職実績が確認された。短大は、乳児院や児童養護施設、障害児施設と子どもに関わる施設への就職が中心で、保育学部では、これらに加えて障害者施設への就職実績が一定数確認された。

これを受けて、短大保育科より、施設実習および就職支援の現状と課題について報告がなされた。施設への就職が少ない背景として、保育実習Ⅰ(施設)の実施時期が2年後期であることが示された。学生の就職活動までに施設の仕事を実践的に理解する場がないことで就職に結びつかないことから、1年次に施設見学の機会を設けるなどの工夫が紹介された。また、これに向けて、各施設への協力の呼びかけがなされた。

保育学部からは、目指す人材として、「福祉・教育の仕事に魅力を見出し、長く活躍できる専門職の育成」、「4年制課程の中で、未来の福祉・教育を担うリーダーの育成」、「職業人として、より高きを目指して成長し続けられる人材の育成」を目指して、実習指導および就職指導での取り組みについて紹介された。具体例として、ゼミ活動やボランティア活動、地域連携活動などが挙げられた。

(2) 施設からの話題提供: はじめに、社会福祉法人和光会の児童養護施設わこう施設長である徳田義盛氏より、ライフステージに応じた専門職としての働き方について話題提供がなされた。学齢期を対象とした保育専門職には、乳幼児期からの発達の道筋に関する知識とスキルが必要であり、それがあるからこそ学齢児を対象とした生活支援の専門性向上が期待されるとのことだった。このような観点から、分科会に出席した学生に向けて、実習や進路選択に向けた激励がなされた。

一方、社会福祉法人輝望会の障害者支援施設沼津のぞみの園において実習指導を担当する須崎智子氏より、施設実習指導の実際について話題提供がなされた。輝望会では、複数の障害児(者)施設において実習生を受け入れており、各施設での実習担当者により構成される「実習担当者会」でより良い実習指導に向けて協議がなされているとのことだった。また、施設実習担当職員が実習や協議会を通じて養成校の実習担当教員とつながりを作ることにより、就職1~2年目の職員へのフォローアップが円滑に

行える実践例についても紹介された。

(3) 参加者とのディスカッション：多くの施設職員から、学生の生の声を聴きたいとの要望があり、出席した保育学部の3年生から実習に向けた事前準備や心情について発言がなされた。学生には事前準備を求めず、その場で率直な意見や感想が出されたが、学生のリアルな声として施設職員や教員にとって気づきの場となった。

実習担当職員として出席した卒業生からは、実習生としての学びと、就職してからの職員教育の共通点や相違点などが述べられ、養成校から施設への教育の連続性について互いに考え、共有する機会を得た。

(文責：赤塚めぐみ)

シンポジウム報告書

「協働する実習指導－質の高い保育者養成を実現するために－」

【担当者】

- ・伊藤理絵（保育学部，企画）
- ・森広樹（保育科，統轄・講師対応・オンライン対応）
- ・遠藤知里（保育科，統轄補佐）

【出席状況】

※次年度、参加希望の方々が、より参加しやすい形態・日程について検討する必要あり。

	出席者数	申込者数	欠席者数
対面	33名	39名	6名
オンライン	14名	22名	8名

【開催方法】

オンライン・対面でのハイブリッド

● 17:10～17:20 趣旨説明（伊藤）

令和2年6月に制定された一般社団法人全国保育士養成協議会保育士養成倫理綱領には、保育者養成に携わる教職員に、保育者を養成する営みの質の向上を自主的・自律的に省察し、自らの研究・教育内容等をより良いものに改善していく姿勢の在り方が明示されている。相次ぐ“不適切保育”の報道は、保育者養成に携わる教職員等が、質の高い保育者養成を目指して養成を行ってきたかという、我々自身への問いかけでもあり、より一層の実習施設との連携・協働が求められてもいる。

昨年度の分科会1に引き続き、保育者を目指す学生が、子どもの最善の利益を保障できる保育者になるための実習指導の在り方について考え、さらに今年度は、シンポジウムとして発展的に、協働する実習指導に向けて目指していきたい方向性について、話題提供者と参加者の皆さまと分かち合う時間としたい。

● 17:20～18:40 話題提供（司会・進行：遠藤，オンラインファシリテーター：森）

1. 中村章啓先生（社会福祉法人柿ノ木会幼保連携型認定こども園 野中こども園 副園長）

実習指導と現職者教育について、今、まさに試行錯誤中である。保育を楽しめる人を増やしたい、一方で、過剰な負担とならないようノンコンタクトタイムに埋め込むなど、実習指導が現職者教育と連動するようにしていく必要がある。エピソード記録を共有するにしても、心理的安全性が担保できなければ、互いの保育観は語れない。豊かな対話が成立できる前提条件としての関係性構築から、始めていきたい。

実習指導は、保育者を育てるための指導でなければならない。実習指導の評価や方法は適切だろうか。往還型と言われるが、養成校から園へのフィードバックがなされないのであれば、Uターン型ではないか。歩み寄り、園からも行っていかなければならない。養成校での授業見学をすることで、自園の実習指導の向上にも繋がっていくのではないか。養成と現職教育が連動することが、不適切な関わりの予防・対応にもなっていく。実習施設側も団体レベルで意見交換し、現職者も学び直しができるようにしていきたい。

2. 牧野彰賢先生

（社会福祉法人ほうりん福社会法人理事長・幼保連携型認定こども園寺子屋まんぼう園長）

8年前から実習指導の改革を行った。きっかけは、教育実習の単位が不可になってしまった学生を採用したことに始まる。当時、保育実習指導の実態を調べてみると、実習指導をどうするかを学ぶカリキュラムがないことが分かった。保育実習の指導法はどこで学ぶのか、養成校でも教えていない現状があり、実習指導への疑問と課題が生まれ、実習生は未来の保育者、未来の保育者としてどう育てるかの模索が始まった。養成校には、日誌を毎日書き続ける意味や、訪問指導の在り方、卒園児を実習生として受け入れることの是非について疑問をもっている。

子ども主体の保育について学ぶ実習にするためには、子ども一人一人と対話し、実習生が子どもをみとる環境を用意することが必要である。保育者・子ども・保護者との関係性も含めて、関係性を生かした保育を実践するため、ラーニングストーリーをベースにしたポートフォリオ型の成長ストーリーを取り入れており、実習指導にも生かしている。園のOJTにもつなげられるように、地元の研究者が入ってもらい実習委員会を発足、実習生には実習事後指導の参加を義務付けて園での実習反省会を実施し、実習生を介した養成校との連携や、未来の保育者と若手保育者が共に創る育ち合いとなるような体制づくりを進めている。現在、今年度の実習生受け入れが既に72人となっており、謝金等で実習指導者の職員を1名確保しているが、実習指導行政等からの助成金・補助金の交渉をし、実習指導者としての職員の増員もしていきたい。また、パソコンが苦手な学生が増加しているため、実習日誌のアプリ化の必要性も感じている。

[参考文献]

那須信樹（編著）『保育者のためのキャリア形成マネジメントブック』みらい，2023年

大豆生田 啓友 (編著)『0～5歳児 子どもの姿からつくる これからの指導計画』チャイルド本社、2023 年

3. 池田美穂 先生 (幼保連携認定こども園常葉大学附属 ところは幼稚園 園長)

平成 22 年度から、保育そのものを見直した。一斉画一保育から子ども主体の保育へ転換する中で、小学校から褒められる「話の聞ける良い子」を育てており、大人が良かれと思っていた保育が、実は子どもの思いを無視していたのではないかということに気付いた。当時の改革を促すきっかけとなった元園長の稲葉昌代先生 (当時、常葉学園短期大学保育科教授) の「子どもの顔が見えない」という言葉を真摯に受け止め、一つの方法でクジラを作る必要はなかったのではないか、見栄えを意識した運動会にする必要もなかったのではないかなど、今までの保育を一つ一つ見直していった。それから今まで、子どもたちが自分たちの運動会になる保育の在り方など、より子ども主体の保育について改善をし続けている。そのような保育者たちの現場での奮闘の姿を実習生にも感じてほしいし、経験として学べるような実習指導になればと考えている。そのためにも、保育学部・保育科との連携が必要であり、もっともっと先生方に足を運んでほしいと願っている。

4. 藁科知行 先生 (駿遠学園管理組合園長・臨床発達心理士・公認心理師)

幼児教育を 10 年経験して現職に就いているが、基本的に大切にしたいことは、保育所実習も教育実習も同じだと考えている。特に施設実習では、施設保育士としてキャリアを形成していくという意識という点では、園での実習と比べて低いという現状がある。施設保育士になるための実習というよりは、保育者になるための実習指導として、何を大切に伝えていくかを考え続けている。特に、行為を挟んで、共感を通して、関係が育っていくということ、一緒に過ごすことで関係を築いていくということを実習を通して経験してほしい。

例えば、日誌では、こどもの行動の意味や機能について「分析」「考察」してほしい (アセスメント)。「分析」「考察」をした上で、意図的にかかわること (プランニング) につなげてほしい。分析・考察・意図的なかかわりがわからないような観察日記になってしまうと、施設実習として評価するのは難しい。

大学での学びや協働に期待することは、援助職への動機づけを高めていくこと、循環しがちな保育現場の思考を乗り越えていくこととして、現場の温度を敏感にとらえた事前の学び・知識の形成について共に考えていけたらと思う。

● 18:40～19:00 話題提供者と参加者との分かち合い

[パネリスト] 中村章啓先生・牧野彰賢先生・池田美穂先生・藁科知行先生

[ファシリテーター]

松浦秩穂子先生 (幼保連携型認定こども園常葉大学附属たちばな幼稚園園長)・伊藤・森

<示された方向性>

・養成校における学びと現場での実習が分断されずに協働していくには、どうしたらいいか。

- ・ 保育実習としての施設実習が、保育者を養成するための実習にしていくには、どうしたらいいか。
- ・ 記録の指導の在り方。指導法の共有と、実習生が「書きたくなる」様式の検討の必要性。
- ・ 養成校－実習生－現場において、保育について語れる関係性の構築に向けていく。

● 19:00～19:10 クロージング（伊藤）

パネリストの先生方から一言ずつコメントをいただいた。それぞれが明日からできることを実践しながら、長期的な展望をもって協働して進めていくことを確認した。

（文責：伊藤理絵）